谷津田だより（番外編）
～熊本・天草紀行～
平成26年5月後半から9日間

◆平成26年、5月後半から9日間ほど九州に行っておりました。
家内の友人が熊本に引っ越したので訪問がてら球磨川の源流近くや天草を訪れました。
何回かに分けてレポートします。

第1話

『熊本紀行　その１　球磨川を訪ねて』

◎球磨川を訪れたのは初めてでした。ただ、学生時代に人吉市出身の友がいて球磨焼酎（米焼酎）のことは聞いて知っておりました。球磨川は、熊本県南部の人吉盆地を貫き八代湾に流れ込む一級河川で最上川・富士川と並ぶ日本三大急流の一つと言います。

※**球磨川**…水系　一級水系、長さ　115キロ、水源　球磨郡水上村（熊本県）が源流、
河口合流先　八代海（熊本県）にそそぐ。

・東京から電車を乗り継ぎ訪れた球磨郡錦町は球磨川の南側に位置する静かな農村地区でした。
迎えに来ていただいた友人の車でお宅に向かう前に、河川敷に案内をしていただきました。
数分乗ると球磨川に到着し、河原に薄ピンクの花（バラ？）が咲いているのが見えました。車を降りて河川敷に下りると一面の淡紅色の花が群生しておりました。ノイバラより全体に少し大きく花は白色から淡紅色で雄蕊の黄色がマッチしていてとても美しい花でした。
バラ科のツクシイバラ（筑紫薔薇）でした。

ツクシイバラの群生

　ネットで調べてみるとツクシイバラは、バラ栽培の土台として適していたため、盗掘や河川環境の変化に伴い減少の一途をたどっているそうです。熊本県では2004年に県レッドデータブックに絶滅危惧種Ⅱ類に指定し保全を図っているそうです。現在自生地は大変少なく訪問した球磨郡錦町の河川敷で唯一、群生を見ることができるとのことでした。河川敷では町主催のイベントも行われます。皆さんも一度訪れてみませんか。

肥薩線人吉駅ですれ違ったSL

・その後、友人のお宅に伺いました。家には居間に炉があり時代物の自在鍵も下がっていました。お風呂もあるのですが車で数分の町営温泉が便利とのことで温泉に浸かって来ました。その後、久しぶりの出会いのため食事をしながら家内と友達のおしゃべりはずっと続いていました。
・外が暗くなってから自宅から50メートル位の場所に行きました。
坂を下りると右手の傾斜地から浸みだす湧水が集まってできている小川のまわりにポツ、ポツと光が点滅していました。蛍でした。
平家ボタルより一回り大きなゲンジボタルでした。中部山岳地帯を境として東と西で光間隔が異なるそうですが、確かに光る周期が早いように感じました。周囲が暗い為満天の星も輝いており気持ち良い最高の夜でした。ゆっくり眠れましたが、朝方、庭に飼っている鶏（10羽位か）の時の声で目が覚めました。

　そうそう、寝る前に台所の窓の外にヤモリがペタッとくっついていました。まさに自然度100パーセントでした。
　　※我が家にこの10年来夏になると現れる守宮が5月29日 の晩出現した。半年ぶりの訪れだ、心なしかだいぶ大き くなったようだ。我が家への夜の訪問者はこのヤモリ1匹だけです。

ヤモリ

◇◆« 俳句 »◆◇船橋市在住　iさん作

大きうになりて見参守宮
どのこの年の初の訪れ
ヤモリ君

第2話

『熊本紀行　その２　球磨川の中・上流にて』

◎友人宅に一泊した翌日、球磨川の源流の一つである集落に行きました。
川沿いに広がる村は、人口が2500人、標高230メートル、豊かに湧き出る湯の街でした。
友人の知り合いの方の案内で山道を巡り、山村に県外から移住して来ている方の家を巡りました。
古い空き家を低額で借りている方、無料で借りている方、自分で家を作ってしまった方、皆ユニークでしっかりとした考え方を持っている方ばかりで魅力的でした。
　カッコーやホトトギス、シカやイノシシ、渓流にはヤマメと自然がいっぱいの中、自然と共に暮らす生活に驚くばかりでした。

・もう一つ驚いたのは、犯罪が非常に少なくお巡りさんが暇だということでした。そういえば、巡ったどのお宅も（当日宿泊した民宿も含めて）鍵がかかっていませんでした。というか鍵がない家もありました。
現に訪問したうちの２軒は不在でしたが、家の中に自由に入りました。戻ってきたどちらもの家人は、いつでも入ってください。お茶も自由に飲んでくださいと言っておりました。
村で観察した一部を紹介します。

・ブッポウソウを見ました。
　ブッポウソウは夏鳥としてやってくる渡り鳥です。数は少なく全国で1000羽位だそうです。川の中州を見ていた時、ハトくらいで黒っぽい鳥が上空を旋回してるのに気づきました。遠くはっきり見えませんでしたが、嘴が赤く両翼に大きな円形の白斑が見えました。ブッポウソウ科のブッポウソウでした。

ブッポウソウ

ヤマアジサイ

・山道の白い花はヤマアジサイとヤボドウゼンでした。ヤマアジサイは、半日陰の湿り気のある林や沢沿いに生育しているアジサイより葉が長細くガクアジサイをシンプルにしたような楚々とした美しい樹木です。それと、ヤボドウゼンは、おそらくヤブドウゼンと思います。こちらはセリ科の植物でノダケかシシウドに似た姿をしています。
　民宿のおかみさんによると山菜としてとてもおいしいという話でした。

ヤブドウゼン

・田植えは6月上旬だそうです。千葉では5月の連休の田植えが普通ですが、こちらは今頃からが田植え時期だそうです。

棚田　※左下はツクシイバラ

　田の水入れ、代掻き作業があちこちで見られました。ただ、源流付近の水田はほとんどが棚田で、作業は大変そうでした。上部に位置する水田から順番に下の水田に水を流していく、見ていると水を送る細かな仕組みなどがありとても興味深い様子が見られました。

・次回は、ここから少し下流域の話題です。

◆ブブッポウソウ…ハトより少し小さい濃い緑色の鳥。
嘴と足が目立つ紅赤色で見間違えることはない。
翼の初列風切羽の中間に白紋があり、これは飛ぶ時にいちじるしく目立つ。保育社「野鳥の図鑑」参照。

第3話

『熊本紀行　その３　球磨川中流域にて』

◎球磨川上流に沿ったくま川鉄道に乗って水田の広がる集落の民宿に移動しました。民宿のリビングから見る庭は、花・花・花と素晴らしいものでした。
今は花期が過ぎていましたが10坪もありそうな藤棚は圧巻。
一面のサツキ、木々の種類も多様でした。
　夕食後、宿のご主人の車でホタルを見に行きました。
田んぼの脇に流れる小さな小川のまわりの低木の中にこちらにもあちらにもと、点滅する光が見えました。ざっと200余りでしょうか。数組家族連れが見に来ていましたが、暗闇の中ゆっくりとホタルを堪能しました。

　夜は、窓の外から聞こえてくるカエルたちの鳴き声がうるさいほどで家内は寝不足になったと言っていまし　た。
ここも自然度100パーセントです。

・翌日は家内の友人の知り合いの方に人吉市内を案内していただきました。

人吉市は、熊本県南東部に位置し市の中心を球磨川が 流れる鎌倉時代から700年続いた人吉藩の歴史文化が残る町です。
ボランティアで市内の案内をしているＫさんの解説はユーモアをたっぷり取り入れ、初めての私たちにも分かりやすいものでした。
案内頂いた主な場所は次の通りです。

・人吉城…日本百名城に選定
・永国寺…幽霊の掛け軸があり、幽霊寺の名も
・青井阿蘇神社…806年創設、現在の建物は慶長14（1609）年から18年にかけて造営。茅葺の桃山様式の楼門はすばらしい。
・その他…焼酎蔵、鍛冶屋通り　etc
・翌日の朝、天草に出発する前に民宿のまわりに広がる水田地区を少し散策しました。

　泊まった民宿の水田（現在は米作りを委託しいるという）に沢山の生き物が見られました。見られた生き物は次の通りです。

・ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）と
・ジャンボタニシの卵（鮮やかなピンク色）、
・豊年エビ、
・トノサマガエル（トウキョウダルマガエルではありません）
・鳥類など
・昆虫など

球磨焼酎…球磨焼酎は、原料は米のみ。
人吉球磨の地下水で仕込んだもろみを蒸留したものです。
　球磨地方には現在28軒の蔵元があり、約150種の銘柄を造っています。（人吉市観光案内パンフ参照）

青井阿蘇神社案内時のスナップ
（中央の後姿の男性がＫさん）

ジャンボタニシ

ジャンボタニシの卵

豊年エビ

トノサマガエル

第4話

『熊本紀行　その４　天草諸島編』

◎熊本駅から三角線に乗り換え終点の三角駅で下車。5分ほど歩きシークルーズの乗り場三角港に着きました。

出航まで1時間弱あり、近くの物産館によりお土産を見たり食堂に寄りました。

天草島本渡港まで約1時間の乗船です。19トン91人乗りの新型旅客船は、ほとんど揺れず乗り心も良かったです。

私はカメラを抱えてずっと甲板のベンチにおりましたが、海鳥は、ほとんど見られず残念でした。

途中天草松島港に寄り目的地の本渡港に接岸しました。

途中、寄港地松島港に建つ天草四郎時貞（島原の乱の指導者）の銅像

静寂の中よく通る声で鳴いているのはイソヒヨドリ。嘴に何かくわえ、盛んに行き来している姿から子育ての最中のようでした。

ピーヒョロロの声は海辺でお馴染みのトビです。

・本渡港の近くのバスセンターから小一時間路線バスに乗って宿泊予定の富岡地区に移動しました。日暮れまでまだ少し時間があり、ホテル周りを散策しました。すぐ後ろには鎮道寺など由緒ある寺院がありました。ホテル下に広がる浜辺は夏に海水浴場として賑わう所だそうです。
散歩をする人が2，3人見られるだけでとても静かな場所でした。

◆**天草**（あまくさ）…天草諸島は九州西部の熊本県と、一部は鹿児島県にまたがる諸島。
漢名は苓州（れいしゅう）。天草を甘草（かんぞう・あまくさ）にかけ、その漢名「苓」からとっているという。キリシタン弾圧や島原・天草の乱などの悲劇があった地。ちなみに宿泊地は苓北町。

カラスよりも、よほど数は多く港の主のようにあちこちで旋回していました。海上が曇っていてよく見えませんでしたが、双眼鏡で覗くと波間にミズナギドリ（ｓｐ）がかなりの数飛んでいました。

・山側を歩くと道端に黄色や白の花をつけた木々や草たちが目立ちました。なかでも目立ったのは紫色がひときわ美しい朝顔でした。
おそらく琉球朝顔の仲間かと思われました。
自生と思われ、道端の茂みいっぱいに蔓を広げ沢山の花をつけた姿には存在感を感じました。
家内は相変わらず、道端に繁る草や木に目を向け小さな虫たちの姿を追っていました。

琉球朝顔

第5話

『熊本紀行　その５（最終）天草諸島編』

◎ホテルの山側には大きく立派な寺院がありました。ここは文禄元年（1592）キリシタン大名小西行長創建、良規開基とされている寺「鎮道寺」で、元禄3年（1650）類焼にあい、全焼したといいます。

この寺院には勝海舟の落書きがあるそうで、安政4年（1857）と5年に訪れた海舟がお堂の柱に落書きを書いたのが残っているそうです。

5年の落書きは

「蒸気の御船にのりて再びここ旅に寝せしかばたのまれぬ世を経れど
契りあらばふたたびここに月を見るかな」で、現在も残っているそうです。

・鎮道寺と隣の寿覚院を訪れホテルへ帰る途中タヌキをみました。

お寺の石垣方面の草地から道路わきのＵ字溝に何かが飛び込むのを見つけ、カメラを構えてしばらく待っていました。溝から顔を出したのはタヌキでした。

そういえばここ天草も、熊本ですね。

熊本地方のわらべ歌に

「あんたがたどこさ、くまもとさ・・・（略）
仙波山にはたぬきがおってさ、煮てさ、焼いてさ・・・」

‥というのがありました。

熊本にはやはりタヌキが似合いますね。

・ホテルのすぐ下に海とつながっているミニ入り江（池のように見えます）がありました。

真ん中に大きな岩があり周りには船虫やカニがいっぱい見られました。今は干潮時のせいか水は少ししかありませんでした。

奥の方に行ってみるとそれでも水中に小魚の群れが泳 ぎ、イカの一種（コウイカ？）が泳いでいるのが見えました。

ふと、近くの草地に小鳥が止まったのに気づき双眼鏡で覗くとスズメでした。ただ、普通と違っていました。

それは、全身がほぼ白く羽の一部分のみが褐色のアルビノ個体でした。これだけ白い個体は大変珍しいものです。

ただ、動物のアルビノ個体の寿命は他の個体より大変短いと言われます。

他の個体より目立ち天敵に襲われる率が高いのです。

無事生き抜いていくことを願いたいものです。

（なお、白ヘビもアルビノで色素が抜けた固体です）

自生のハイビスカス

・地元のイベントの日程が近づいていますので、私だけ帰ります。ホテル近くの停留所からバスで港に行き、船で三角港に渡り、あとは電車、新幹線を乗り継ぎ帰ります。　バス停に着き少し時間があったので近くの神社などを見て回りました。

　神社の鳥居に大きな注連縄が張ってありました。
ふと気が付くと道路わきの民家の軒先にも注連縄が取り付けてありました。　それもどの家にも皆注連縄がありました。
お正月でもないのにどうしてか。
　それはキリシタンの弾圧に基づいた風習だそうです。自分の家は伴天連ではないという証しにどの家も一年中注連縄を張っていたということでした。
　その風習が現在まで残っているのですね。
ただ、今は非キリシタンの証しではありませんが…。

朝7：45にホテルを出て千葉NTの駅に21：00頃に着きました。
家内は熊本の手前の八代駅からローカルに乗り換え友人の家に行きました。まだしばらく熊本に残るようです。

※帰りの船上から噴火で大きな被害が出た雲仙普賢岳を撮影しました。